朱夏の女たち〈下〉

五木

朱夏の女たち

下

五木寛之

文化出版局

朱夏の女たち〈下〉

定価——一九八〇円
発行日——昭和六十二年五月三十日　第一刷

著者——五木寛之
発行者——大沼　淳
発行所——文化出版局
東京都渋谷区代々木三—二二—一　郵便番号一五一
電話——(〇三)三七〇—三一一一(大代表)
(〇三)三七九—一三〇一(販売直通)
振替——東京二—一九五六七〇番
印刷所——大日本法令印刷㈱、㈱文化カラー印刷
製本所——大口製本印刷㈱

©Hiroyuki Itsuki 1987 Printed in Japan

ISBN4-579-30282-6

朱夏の女たち〈下〉目次

第十一章　過ぎゆく季節の中で　5
第十二章　それぞれの冒険　27
第十三章　孤独な旅のなかばに　66
第十四章　異邦人のように　84
第十五章　幸福に背を向けて　106
第十六章　さしのべられた腕　124
第十七章　男と女のパラドックス　144
第十八章　夜明けに向かって　166
第十九章　栄光と失意の時　188
第二十章　明日とはいえない明日へ　210

装幀／松永　真

絵／ペーター佐藤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

朱夏の女たち〈下〉

第十一章　過ぎゆく季節の中で

こがらしの音がきこえる。

その音は窓の外の電線の笛のような音と入りまじって、ひどくもの哀しげに響いてきた。

――あの音、嫌いだわ。

笙七重はワープロを打つ手をやすめて、眉をひそめた。朝からずっとスクリーンの上に点滅する小さな字をみつめつづけていたためか、額の奥に鉛のような疲労がよどんでいる。目尻にかすかな涙の気配があった。

――哀しくて泣くんならいいけど、疲れたために涙が出てくるなんて、いやだな。

七重は手の指で首筋のうしろをもみながら思った。それは仕事をしすぎたときに、いつも考えることだった。

愛する男がいて、その相手と心がかよいあわないことでつらい思いをし、そのために涙を流すの

なら、どんなに素敵なことだろう。恋をうしなって死ぬほどつらくても、そのために泣くほうが過労で泣くよりずっといい。

——わたしは女として魅力がないんだ——。

と、彼女は蛍のような字をみつめながら思った。

——もてない女、か。雑誌にそんな女たちのための特集が出てたな。

今朝の新聞の広告を見て、彼女は自分がすくなからず腹を立てたことを思い出した。その婦人雑誌の広告には、『もてないあなたに捧げる愛される女への変身法』という大きな特集記事の見出しが躍っていたのである。

七重は首をふった。急がなくてはならない。いま彼女がとりかかっているのは、音楽雑誌のインタヴュー記事で、テープに録音されたインタヴューアーと、ある作家の対話を文字に起こす作業である。その作家は七重も名前だけは知っている若手の小説家で、活字以外にもテレビ、ラジオ、文明批評などの分野でいろいろ話題をにぎわす活動をしている人物だった。

笙七重はどちらかというと、そんなジャーナリスティックな活動が目だつ作家は好きではない。目だたぬ場所で、こつこつ自分なりの文学の道をあゆんでいるような小説家に親しみを感じている。それだけに、テンポのある軽快な語り口のテープを起こしていても、ほとんどその内容にのめりこむことがなかった。

その話の内容は、ブラジルのカーニバルについてのエピソードで、若い小説家は笑声をまじえな

がら流れるように次から次へと言葉をつづけている。
笙七重は、これまで活字に起こした部分をプリンターからとりだすと、机の上でそろえて、読みなおしの作業にとりかかった。耳からはいってくる会話を文字に打ってゆくうちに、思いがけぬミスや、誤字なども出てくるのだ。彼女は声にだしてその文章を読み返していった。

《ええ。ニューヨークからリオへ飛んだんです。ダイレクトじゃ疲れるし、それにニューヨークにちょっと寄ってみたかったからね。
で、リオへ着いたのが、カーニバルのはじまる当日なわけ。
カーニバルはだいたい土曜日からスタートして最後の日が火曜日で、その翌日が水曜日ですね。その祭りの終わった水曜日のことを、〈灰色の水曜日〉とかっていうんだよね。ちょっと詩的な表現だと思わない？
その当日の朝は晴れてたんだけど、やがて雨がきたんです。ブラジルの雨ってのは、すっごく律義でね。午前中は快晴でも、ある時間になると、必ずスコールのような雨が降るんだ。ニースなんかとちょっと似てるんじゃないのかな。
リオの町はすぐうしろに山があるから、海から吹いてくる風が山にぶつかって、雨を降らせるんでしょう。でも、ブラジルの人たちは雨が降っても全然平気で、傘なんかささないんだ。雨を全身に受けとめるように濡れたままカーニバルのパレードを眺めているんですね。

しかし、行く前から予想はしていたんだけれども、実際に見てみるとカーニバルは民衆の祭りというんじゃないんだよね。はじめの頃はそうだったのかもしれないけど、今はちがう。そうなんです、管理されたフェスティバルっていうのかな。そんな感じがすごくしました》

笙七重は、そこまで読み返して、いくつか句読点を訂正した。わたしだったらどんなふうに喋(しゃべ)るだろうか、と彼女は考えた。雑誌記者を前にしてインタヴューに答える自分を想像して、彼女は苦笑した。

――わたしのがらじゃないわ。

結局、自分はこうして一日中ずっと機械の前に坐って、他人の喋る言葉を活字になおしながら人生を過ごしてゆくのだ、と七重は考えた。

そんなふうにして何年かが過ぎてゆく。そして、さらに十年、十五年、二十年、そのあとは――。

――いやだ。

彼女は声に出してつぶやいた。そんなふうにして自分の一生を終わるなんていやだ。だが、どうすればいいのか？

有名になりたいとは思わない。そんなに沢山のお金がほしいとも思わない。だが、自分で自分のしていることを、充実した思いで感じられるような人生であってほしい。そして行きたい国へ旅をして、その国の人々の生活や、風景や、風の音などをひとつひとつ心にきざむことができる程度の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

経済力がほしい。
いまの彼女は、どうやら生活しているだけだった。とりあえず東京で生きている。だれの助けもかりずに自立している。だが、それだけだった。
自立といえばきこえはいいが、ただ生きているだけの人生に、なんの意味があるのだろう。
――さあ、仕事をしなくちゃ――。
彼女は首をふった。今夜の十時までには全部を打ち終わらなくてはならないのだ。七重がふたたびテープを操作しはじめたとき、電話が鳴った。
「はい」
「秋苑社の水尾ですけど」
「あ、笙七重です。いま、がんばってやってるところですけど」
相手は編集プロダクションの水尾高志だった。大手の出版社をやめて、二十代の若さで秋苑社という編集企画の会社を設立し、けっこう活気のある仕事をつぎつぎにこなしている腕ききのエディターである。
笙七重のことを気に入ってくれて、座談会や、対談の仕事をいつも回してくれている相手だった。
「どこまでいってるの？　予定どおり今夜の十時までに片づきそうかね」
「なんとか、やれると思いますけど」
「じゃあ、事務所で待機してるから、見通しがついたところで電話くれない？　ファックスで受け

る準備しておくからね」
「九時に一度お電話します」
「うん。字のわかんないところは、あけといていいから。きみはちょっときちょうめんすぎて時間がかかるんだよね。もっとさらりと軽く流しといてくれていいから。テープの音のほうはだいじょうぶだね？」
「ええ」
「仕事が終わったら、夜食でもおごるよ。べつに約束はないんだろ？」
「はい」
「じゃあ、のちほど。がんばって」
電話は向こうからきれた。
笙七重は受話器をおきながら、髪を流行のスタイルに短く切って、ミッソーニのスウェーターにコーデュロイのパンツをはいた若い編集者の姿を思い浮かべた。
たしか一流の私大の文学部を出ているはずだ。フランス語もけっこういけるし、よく本も読んでいる。だが、いかにも当節流行の先端をゆく雰囲気の水尾高志が、七重は苦手だった。
――嫌いじゃないんだけどなあ、あの人――。
たしか二十九歳とかいっていた。いつもポリーニの靴をはいて、車はルノーの新しいタイプ、そして背が高く、色白で、坊ちゃん坊ちゃんした青年だ。青山や、代官山あたりで女子大生にもて過

ぎるほどもててるという噂もきいたことがある。

——あんな人がどうしてわたしなんかに目をかけてくれるのかしら？

結局、彼は誰にでもまんべんなく優しいタイプの男なのだろう、と、七重は考えた。それでなければ、わたしのように痩せっぽちの、性的魅力も愛嬌もない、貧乏くさい速記者なんかに親切にしてくれるはずがないのだ。わざわざ夜食に誘ってくれた気持ちを計りかねて、七重はしばらくぼんやり手を休めていた。

——さあ、やらなくっちゃ。

仕事を終えれば、水尾と一緒に食事をするのだ、と、彼女は自分に言い聞かせた。あんな都会っ子みたいなお坊ちゃんはわたしの好みじゃないけど、でもひとりで部屋に帰ってガス台の前に立って食事の用意をするよりは幸せだ。

七重はふたたびテープを回しはじめた。軽快な男の声が流れはじめた。

《例のエスコーラ・ジ・サンバのパレードの会場はね、三つにわかれてるんです。そして一流チームが参加するヴァルガス大統領通りというメインストリートは、両側に鉄パイプで組んだ席があって、そこは大部分が観光客用だけど、プレスがいちばんいい場所を占めている。ぼくもパスポートみたいな取材用の札を首からぶらさげていたんだけど、なんとなく特別席で見るのがいやで、一般席のほうへ行った。

これがチェックが厳しくてね。おまけに入場料がべらぼうに高い。二万円とか三万円とか。カーニバルの期間中はホテルも満員。一泊や二泊じゃ駄目なんだ。最低一週間ぐらいとらないとね。とにかくカーニバルは外国からくる連中に金を落とさせるためにやってるみたいだった。

話をもどして、例のエスコーラのパレードなんだけど、これが時間どおりにははじまらなくってね。何時間もおくれるんですよ。やっとパレードがはじまると、そこらへんの地元の一般見物客を警備員が棒で追いちらすんだ。とても不愉快でした。軍隊は銃をもって出てるし、なんとなく戒厳令下のカーニバルといった雰囲気でね》

笙七重はテープから流れだす声を、足で操作しながら、両手をキーボードの上にすばやく走らせた。喋(しゃべ)っている内容は、ほとんどどうでもいい話だから、かえってスピードがあがる。これがつい気持ちを引きこまれてしまうような重い内容のものだと、仕事がはかどらないのだ。

――九時までにあげてしまおう。

七重はうなずいてスピードをあげた。決して男として関心がある相手ではないのに、なぜか水尾高志の声が頭の奥に残っているのだ。

予定より一時間早く仕事を終え、笙七重は秋苑社の水尾高志に電話を入れた。

「笙です。原稿あがりました」

「そうか。はやかったね。ありがとう。すぐファックスで送ってくれる？」
「はい」
「それから十時半に麻布十番のブローグで会おう。例の大きな靴の看板がでてる喫茶店さ。前に打ち合わせをした店だからわかるだろう」
「ええ」
「じゃあ、原稿のほう、たのむよ」
笙七重は電話をきると、先月の末にようやく入れたファクシミリに原稿をセットした。ジーッと虫が鳴くような音をたてて、機械が作動しはじめる。重ねた原稿が一枚ずつすべりおちてゆき、下へ吐きだされるときチリンとかすかな音がする。
一枚ずつマークがついているかどうかたしかめながら、七重は原稿を送った。最後の一枚が終わると、しばらくしてため息をつくように機械が止まった。
笙七重はもう一度電話を入れて、落丁がないことをたしかめ、机の上を片づけた。それから洗面所の鏡の前で、髪をとかし、すこしだけメイクをした。
ふだんいつも素顔にちかい化粧しかしていないため、口紅がひどく目だつような気がする。七重は舌で唇をなめると、ティッシュで紅をこすりおとし、ようやく落ち着いた気分になった。
――ネズミみたい――。
鏡の中の自分の顔をじっとみつめて、七重は苦笑した。

——どうして人はそれぞれちがった形をあたえられてるのかしら。
不平等じゃないか、と、思う。背が低いだけでなく、全体に貧弱な自分の体が、なぜか腹立たしかった。目鼻立ちもぱっとしないし、表情もとぼしい。それにどうも顔色がさえないのは困る。
——やっぱり魅力のない女なんだわ。
七重は肩をすくめて、鏡の中の自分にペロリと舌を出した。

私鉄と地下鉄をいくつか乗りかえて、笙七重は約束の時間のすこしまえに、麻布十番のブローグという店についた。
この辺にはめずらしい古びた造りで、全体に英国調の雰囲気を出したコーヒー・ハウスである。
奥のテーブルに坐ると、七重はコーヒーをたのんで、バッグの中からとりだした文庫本のページを開いた。文庫本にはカバーがかけてある。一週間ほど前に買ったフランソワーズ・サガンのインタヴュー集だった。
隣りの席で肩幅の広い男物のようなジャケットを着た若い娘が、大声で連れの青年と喋っている。彼女の口からポスト・モダンだの、ドゥールーズだのといった言葉が軽やかに飛びだすたびに、七重はひどく居心地わるい思いをした。自分がなにか時代からとりのこされた余計者のように感じられるのである。
「やあ、待った？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook